

Global Classrooms



グローバル・クラスルーム日本協会 報告書



2024 年度

高校模擬国連国際大会への第 18 回日本代表団派遣支援事業



一般社団法人グローバル・クラスルーム日本協会
Japan Council for Global Classroom (JCGC)

目次

はじめに.....	2
団体紹介.....	3
会員.....	3
議場概要・派遣報告	5
参加者報告(アドバイザー)	12
参加者報告(派遣生).....	13
支援団体一覧.....	29

はじめに

この度、高校模擬国連国際大会への 18 回目の日本代表団派遣支援事業の報告書を皆さまにお届けできる運びとなりました。本事業にご後援いただいた関係省庁・団体、ご協賛、ご協力いただいた企業・法人等、多くの皆さまからの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本事業は、第 17 回全日本高校模擬国連大会において優秀な成績を収めた 4 校 8 名の高校生が日本代表団として高校模擬国連国際大会に参加するというものです。今回、日本代表団はアメリカ合衆国の大使として世界中の高校生が集まる舞台で、できる限りの準備をして会議に臨みました。

本年度の事業の大きな特徴として、政策発表会の期間を 2 日間とし、担当国の政策の練度を一層高める取り組みを追加したことが挙げられます。派遣生が、政策発表会初日に持参した政策はアドバイザー・弊協会のフィードバックを元により現実的かつ効果的な政策へと洗練されていきました。また、政策の練度を高める中で自ずとコミュニケーションが生まれ、派遣生同士や派遣生と弊協会の仲もより一層深まりました。

上記の取り組みや日々の準備をもとに、派遣生は皆、持てる力を総動員して世界に挑戦しました。派遣生は、世界中の高校生たちと議論を交わす中で、うまくいくこともあれば思い通りにいかないこともありました。しかし、そのような経験を通じて、派遣生たちは国際社会の複雑さや世界の広さを肌で感じ、貴重な学びを得ることができました。

この経験は、派遣生たちの視野を大きく広げ、国際社会で活躍するために必要なスキルや心構えを養う機会となったはずです。本事業を通じて得られた経験や気づきは、派遣生の将来の糧となることでしょう。彼らが今後、グローバル社会のリーダーとして活躍し、世界平和と持続可能な発展に貢献していくことを心から期待しています。

最後に、本事業の成功は、多くの方々からの温かいご支援とご協力なくしては成し得ませんでした。改めて深く感謝申し上げます。グローバル・クラスルーム日本協会は、これからも次世代を担う若者たちの育成に尽力してまいります。皆様におかれましては、今後とも変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますよう、謹んでお願い申し上げます。

一般社団法人グローバル・クラスルーム日本協会 2024 年度 事務総長 大久保 慶隆

団体紹介

一般社団法人グローバル・クラスルーム日本協会は、高校模擬国連活動の普及と発展を目指し、全日本大会の開催及び国際大会への派遣支援活動を行う団体です。私たちは、以下の理念に基づいてこれらの活動を行っています。

「国際連合及び国際関係に関する研究と国際問題の正確な理解又その解決策の探求を促進するとともに、豊かな国際感覚と社会性を有し未来の国際社会に指導的立場から大いに貢献できる人材を育成し輩出する。」

2007 年、弊協会の前身たるグローバル・クラスルーム日本委員会が日本で初めて高校模擬国連国際大会への日本代表団の派遣支援を行ったことから、日本の高校模擬国連活動が本格的にスタートしました。それ以降、全日本高校模擬国連大会を毎年開催し、優秀な成果を残した生徒の高校模擬国連国際大会への派遣支援を続けています。

会員

アドバイザー（敬称略）

特別顧問 明石 康

公益財団法人京都国際会館理事長／元国連事務次長

評議員（敬称略・順不同）

評議員・代表理事 米山 宏

公文国際学園中高等部教諭

評議員・理事 澤田 宏

岐阜県立岐阜高等学校教諭

評議員・理事 竹林 和彦

早稲田実業学校教諭

評議員 紀谷 昌彦

日本模擬国連 OB／東南アジア諸国連合（ASEAN）日本政府代表部特命全権大使

評議員 中村 長史

日本模擬国連 OB／東京大学大学院総合文化研究科特任講師

運営会員（敬称略・順不同）

事務総長 大久保 慶隆
慶應義塾大学総合政策学部 3 年

副事務総長 清原 萌香
上智大学法学部 3 年

副事務総長 羽山 雄貴
宇都宮大学工学部 3 年

副事務総長 田端 開
慶應義塾大学法学部 2 年

研究局長 大野 秀征
慶應義塾大学法学部 3 年

研究局長補佐 曾我 菜々美
上智大学法学部 3 年

研究局長補佐 筑本 普
早稲田大学文化構想学部 3 年

研究局長補佐 宮澤 佑奈
早稲田大学社会科学部 3 年

推進局長 田中 愛莉
山形大学人文社会学部 3 年

推進局長補佐 中島 大雅
東京大学教養学部文科一類 2 年

派遣局長 後藤 慧
東京大学教養学部 3 年

派遣局長補佐 高槻 俊輔
東京大学教養学部文科三類 2 年

委員 丸小野 成輝
東京大学医学部 3 年

委員 森脇 優
京都大学教育学部 3 年

委員 波多野 花凜
早稲田大学先進理工学部 2 年

委員 古松 千鈴
東京大学教養学部理科一類 2 年

委員 山本 晴菜
鳥取大学医学部 2 年

委員 嵐田 倖永
国際教養大学国際教養学部 1 年

委員 小澤 秀周
中央大学法学部 1 年

委員 小島 圭登
東京大学教養学部文科一類 1 年

委員 仲田 万智子
慶應義塾大学文学部 1 年

委員 三澤 聖子
国際教養大学国際教養学部 1 年

議場概要・派遣報告

企画名称

2024 年度高校模擬国連国際大会への第 18 回日本代表団派遣支援事業

主催

一般社団法人グローバル・クラスルーム日本協会 (JCGC)

内容

米国国連協会などの主催により開催される高校模擬国連国際大会 (Global Classrooms International Model United Nations Conference) に、グローバル・クラスルーム日本協会主催の第 17 回全日本高校模擬国連大会にて選出された高校生が日本代表団として参加するための派遣支援事業である。

参加者

1) 日本代表団 (8 名)

海城高等学校	阿部 潤太 尾関 裕宜
実践女子学園高等学校	岩崎 蝶々 草間 咲良
西大和学園高等学校	吉村 京葉 中農 陽向
渋谷教育学園渋谷高等学校	菅野 紘子 二井 春香

2) 同行教員 (2 名)

実践女子学園高等学校	キンブル ロバート ポール
西大和学園高等学校	鈴木 大河

3) グローバル・クラスルーム日本協会 (3 名)

評議員・代表理事	米山 宏
研究局長	後藤 慧
研究局長補佐	高槻 俊輔

参加会議

※日本代表団の派遣生はアメリカ合衆国を担当いたしました。

高校	派遣者	議場	議題
海城高等学校	阿部 潤太 尾関 裕宜	国連総会第三委員会 (GA3)	A Framework for Achieving Net Zero by 2050 in Educational Institution
実践女子学園 高等学校	岩崎 蝶々 草間 咲良	国連開発計画 (UNDP)	Ensuring the Safety of Asylum Seekers in Periods of Refugee Crises
西大和学園高等学校	吉村 京葉 中農 陽向	国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)	Accelerating the Modern Industrial Development of the Global South
渋谷教育学園 渋谷高等学校	菅野 紘子 二井 春香	世界貿易機関 (WTO)	The Integration of Africa into the Global Trade System

政策発表会

都内の会場にて 2 日間にわたり派遣生が国際大会へ向けた準備の成果を英語で発表しました。困難な議題に取り組むうえで、リサーチによって得た情報を分析し、会議で提言する政策立案のために思考を整理する機会となりました。当日は弊協会スタッフより政策に対する詳細なフィードバックを行ったほか、派遣生同士の質疑応答が活発に見られ、国際大会へ向け日本代表团として団結するとともに、それぞれのペアが抱える課題を明確化することができました。

(JCGC/高槻)

駐日アメリカ合衆国大使館

渡米に先立ち駐日アメリカ大使館にて派遣生が国際大会に向けて立案した政策について発表し、現役の外交職員の方からフィードバックをいただきました。

派遣生はリサーチを進める中で客観的な根拠をもとに、それぞれの会議で扱われる議題に対してクリティカルに作用すると思われる政策を立案してきました。しかし、フィードバックの中ではアメリカ特有の国内事情や外交事情をもとに各政策に対して鋭い指摘が行われており、政策の有効性や実行力が問われていました。結果的に派遣生はアメリカという国を担当することの難しさを痛感し、国際大会の準備に向けた新しいスタートを切る良い機会になったようでした。また、フィードバックをいただいた後に政策のブラッシュアップに向けてアメリカ特有の事情が発生している背景を明らかにしようと、どの派遣生も質問を通してアメリカという国への理解を深めようとする姿勢がとても印象的でした。

(JCGC/後藤)

国連事務次長・軍縮担当上級代表 中満泉様



私たちは 25 日、国連本部で中満さんのお話をお伺いする機会がありました。中満さんは、国連事務次長・軍縮担当上級代表として、軍縮に関する様々な会議にご出席され、大国同士の関係を取り持つことなどを通して国際上の軍事的紛争の解決に尽力されています。

中満さんは、今の国際情勢が 5 つの大きな変動の中にあるとおっしゃいました。地政学的リスク、経済秩序の崩壊、大規模な人口移動、環境問題と技術変革です。特に地政学的なリスクに関して、中満さんは国際社会での対立が複雑化していることを強調されました。その中でも、“Regional Power”と呼ばれ、近年急激な経済成長を遂げているブラジルやインド、南アフリカの台頭によって多国間で関係を築き交渉をするマルチ外交の重要性が高まっているとのことでした。ここで、中満さんが懸念されていた

のが、小国の立場です。ウクライナ侵攻やガザ侵攻という事例によって、国際法の実行力が弱まる危険性があり、安全保障が脅かされていると感じた小国は動揺していると仰っていました。さらに、この一連の危機的状況の中で、国連の対応も非難的になされているそうです。ウクライナ侵攻における人道的被害は迅速に対策を講じることが出来ていたのにも関わらず、ガザ侵攻におけるイスラエルの明確な人道法違反は同様の批判をしていなかったことから、国連は「ダブルスタンダードだ」との非難が相次ぎました。

そして、この現状を踏まえて中満さんは 3 つの解決策を提起されていました。長期的利益の追求、変革への勇気と若者の意見発信です。様々な国際問題が同時多発的に発生している状況下で、中満さんは世界全体で対応することの重要性を強調されました。特に、各国が短期的な利益の追求ではなく、長期的な視点を持ちながら他国と交渉することで、争いは回避されるということを繰り返し話されていました。その上で、各国間の不平等をなくした国連の組織体制の再構築も急務の課題であると仰いました。

最後に、中満さんは国連職員として、国連の原則を追求し続けるとおっしゃいました。ウクライナ侵攻に関して、ロシア大使との白熱した議論の中で、「結局、あなたたちが国連憲章を書いたのでしょうか (Afterall, you were the drafters of the charter)」とおっしゃったそうです。どこの国にも属さない公平な国際機関の一員として、中満さんの揺るがない信念と行動への勇気を私たちは肌身で感じ取ることができました。

中満さんのお話を伺い、二つの点に気づくことができました。

一つ目は、協力の重要性です。世界が多極化する中、国連などの国際的な場での協力が非常に難しくなっています。実際に、模擬国連で環境問題や安保理改革などの複雑な議題を扱うと、全体合意を諦める大使が非常に多いです。しかし、そこで中満さんは国際協力を諦めないことの大切さを教えて下さりました。今のような世界情勢の中、最も恐ろしいことは国際レベルでの対話が硬直化することです。国家間の対話が止まってしまうと、互いの理念などを考慮せずに行動し多くの人々が苦しむでしょう。そのため、交渉を諦めずに尽力することがとても重要であり、それを促進させるために国連が存在するのではないのでしょうか。大会の直前に貴重な言葉をいただき、国際協力・国連の意義を自分たちでそれぞれ考えながら会議に臨むことができました。

二つ目は、若者の声の大切さについてです。最近ではアメリカの大学で学生運動が多発し若者の声が話題になっていますが、中満さんは若い頃から意見を発信することの重要性について語られていました。若者は未来を率いる存在であり、日本では政治などに興味をもつ若い世代は少ないですが、積極的に国際情勢の理解を深めることが国際平和を目指す上で欠かせないのです。私たちは中満さんの言葉に刺激を受けました。私たちが模擬国連を通して学んでいることは模擬国連という活動にとどまりません。知識を常に求め続け、そしてそれを他人に発信していこうと強く思いました。

(洪洪/菅野 海城/尾関)



私達は 26 日、国際連合日本政府代表部を訪問し、次席常駐代表の山中大使にお話を伺いました。私達が模擬国連において普段「模擬」している存在である実際の大使の方に、日本の国連外交についての展望について伺えるという非常に貴重な機会になりました。

ここでは、お話の内容とそこから私達が学んだことについて山中大使の経歴、国際社会の現状、日本の国連外交の大きく 3 点に分けて、紹介させていただきます。

はじめに、経歴紹介とともにそれぞれの役職における活動内容や乗り越えてきた困難についてお聞きしました。山中大使は外務省に入省され、人権理事会担当、外務省人権人道課長、内閣府国際平和協力事務局参事官などを歴任され、国際連合を担当するに至ったそうです。現在は次席常駐代表として人権・人道開発や予算について携わっておられます。大使という役割は、国連・各国政府・省庁をはじめとする様々なセクターとの関わりが大きく、例えば、内閣府国際平和協力事務局参事官のときには、危険な場所への PKO 派遣について、内閣の意見を踏まえたうえで他の政府の方との話し合いを慎重に進めていたそうです。国際的圧力の感じ方の差で衝突が生じることもあるとお聞きし、実際に交渉することの難しさをひしひしと感じると同時に、一国を背負う存在である交渉官や大使の、国益・国際益達成に向けた対話への努力を日々惜しまない姿に憧れを感じました。

次に、ウクライナやガザ情勢、コロナや SDGs の後退などの国際社会の現状についてお聞きしました。また、山中大使は現状問題視されている安全保障理事会と国連における機能不全・説明責任についてもお話ししてくださいました。日本も含めた世界中で安保理に対する不信感が謳われていることは事実ですが、対話の場としての機能は果たされています。分断が深まる国際情勢の中で、対話の場は必要不可欠な最後の砦ともいえ、国際協調という考え方に各国の行動が向かっていけるよう、ブレーキをかけているのだそうです。議論をしているという事実そのことに価値があるのだという山中大使の言葉は、国連の意義を示しているように感じ、またたとえどれだけ困難な道に思えても、皆が合意を信じて議論を始めるから、すべての協力が始まるのだという点において、議論が持つ力というものを改めて実感しました。

最後に日本の国連外交とその展望についてお聞きしました。ここでは国連で“protection”, “empowerment”を通じて取り組んでいる人間の安全保障や、国連内で存在感が増大しているともいえるグローバルサウスの取り組みについても教わりました。日本の外交は目標や価値観を共有したうえでの対話と協力を掲げています。対話という面では、特に途上国や同じ地域の国との間においてたとえどれだけユニークな立場を取っている議題に関しても対話の姿勢を崩さず交渉することや、協力という面においては、積極的な JICA の活動や研修が行われ、その実行や実態の改善に向けて様々な協力体制を敷いて取り組んでいるといったことが挙げられます。同時に日本国内における、若い世代の国際問題や政治への関心の低さについても言及されており、ニューヨーク派遣を初めとした模擬国連という活動を通して得た経験を発信していかなければならないと強く感じました。

大使は国際情勢変化の中で、様々な立場の方の主張を踏まえたうえで、一国を背負う存在です。時には政策が実行される現場の複雑性や実情といったことにまで目を向けなければなりません。ですが大使という特殊な立場の方だけに限らず、どんな人であっても事の本質を捉えようと様々な角度からの情報にふれ、異なる立場の人の意見に耳を傾け、自分なりの解釈を磨き上げていく姿勢がなくてはならないということに気付かされた表敬訪問でした。私達も人ごとではないという意識のもと、全てのことに関心をもっていきたいと思います。

(渋谷/二井 西大和/吉村)

国連開発計画(UNDP)



私達は4月26日、主に開発途上国の発展に向けた支援を行っている国際機関である、UNDP（国連開発計画）を表敬訪問をさせていただきました。

ニューヨークを本部とする UNDP の日本ユニットの職員、川瀬友裕さんから UNDP の活動について直接お話を伺いました。UNDP では、開発支援を受けている国々からドナー国まで、170 の国や地域に拠点が存在し多様な国籍やバックグラウンドを持つ人々が働いているため、オフィスはグローバルな環境となっています。

訪問では主に、UNDP の活動について詳しく伺いました。UNDP は国や地域と協力して、国際問題の解決の手段として国の経済開発に取り組み、その他にもネットワークを通じて世界中の人々に UNDP のメッセージを届けています。例として、2021 年に公開された「Don't Choose Extinction」というタイトルの動画が知られています。動画では、アニメーションの恐竜が国連の会議室に現れ、恐竜が絶滅の危機に直面したという歴史的な事実を引き合いに出しながら、人類に対して気候変動の問題に取り組むよう訴えています。現代の気候変動問題の深刻さを強調し、ユーモラスでありながらも、非常に強いメッセージが込められており、多くの人々の関心を引きました。

また川瀬さんは、UNDP の大きな存在意義の一つとして、匿名で支援できることの利点を挙げられました。匿名での支援は、政治的中立性を維持しながら各国が他国を援助することを可能にし、国家間の摩擦を避けつつ、効果的な国際協力を促進することができます。さらに、各国の評判管理を助け、多国間協力の信頼性と透明性を高める重要な役割を果たしています。UNDP では現在、支援先や大まかな用途を指定した各国の任意拠出金を主な資金源として活動しています。今後の展望としてこの任意拠出金を更に増やしていくことが重要です。そして、前述のような匿名性のメリットを活かし、これらの資金を支援する国を特定せず、UNDP に資金を拠出する方法も存在します。今後も UNDP の豊富な経験とネットワークを活かしつつ、開発途上国の開発目標達成を支援するために、より多く資金を拠出してもらうことが重要であると仰っていました。

私たちは国際大会で担当する議場が UNDP であったため、私たちが実際に考えてきた政策の実現可能性についてお聞きすることが出来たことに非常に大きな意義を感じました。ここで伺った政策は、UNDP を介して行う政策であったため、実際に行えるか、さらに厳しい場合はどこが厳しいのかについてお聞きすることができ、会議に向けて非常に大きな成果を得ることができました。

また、UNDP は行っている事業が多いため、UNDP のウェブサイトを開覧し、過去の活動の報告等も拝見しても、なかなか実際の施策がイメージがしにくい面もありました。しかし今回の説明を聞いたことにより、具体的な活動をイメージしやすくなり、自分たちが考えた政策が UNDP の議場で議論するのにふさわしいかどうかを再考することができ、かつ自分達の政策に自信を持つことができました。

質疑応答のために多くの時間を下さったため、「なぜ国際協力が必要であるのか？」や「国際機関は中立である」といった、模擬国連に参加する大使としての心得的なこともお聞きすることができ、国際大会直前に大使としての意識を促され、しっかりとした気持ちで開会式、大会に臨むことができました。

(実践/岩崎、草間)

派遣生



受賞

最優秀賞(Secretary General Award)

渋谷教育学園渋谷高等学校

PP 賞(Position Paper Award)

西大和学園高等学校



参加者報告(アドバイザー)

高槻 俊輔

グローバル・クラスルーム日本協会 派遣局長補佐

東京大学教養学部文科三類 2 年

まず初めに、本事業の実施にあたりご支援・ご協力賜りました皆さま、並びに各校の先生方、派遣生の皆さんに厚く御礼申し上げます。

本年度は本事業にとって変革の一年となりました。弊協会はかねてより安心・安全な事業となるよう尽力して参りましたが、本年度より株式会社 JTB 様による受注型企画旅行とすることで、今まで以上に安定した事業運営体制を構築するとともに、事業内容の質的向上に努めてまいりました。

本年の日本代表団は国際大会に向けた努力と熱量に目を見張るものがありました。アメリカ合衆国という国際秩序の中心であり、それ故に緻密な論理性が求められる国を担当し、議題も例年に増して複雑なものでした。派遣生の皆さんは時にあまりにも困難な課題から逃げ出したくなり、あるいは不安や緊張で押しつぶされそうになったこともあったでしょう。しかしながら、「高校生だから」と妥協することなく準備を進め、実効力のある政策提言に拘り続ける姿からは、本気で国際社会が抱える課題を解決したいという意欲と決意が強く感じられました。実際、渡米先で表敬訪問を実施した際には派遣生の皆さんが積極的に質問するに留まらず、自身の意見を述べる姿が多く見られました。また会議当日には、様々な国・地域から集った参加者の中で議論を冷静に俯瞰し、取り残される参加者のいないよう丁寧に対話するとともに、決議案の作成を主導する際立ったリーダーシップを発揮していました。議場の状況に臨機応変に対応し、準備の成果を存分に発揮する姿は、昨年 11 月の全日本高校模擬国連大会からさらに成長したものであり、派遣生の皆さんは国際大会での経験も糧にしてそれぞれの夢の実現へと努力していくのだらうと勝手ながら想像いたしました。

弊協会は豊かな国際感覚と社会性を有し、国際社会に指導的立場から貢献できる人材の育成を目指し事業を実施しております。約半年にもわたり議題について深く探究し、国際大会に参加する派遣生の皆さんの姿はまさに弊協会が標榜する理念を体現するものであり、改めて本事業の、ひいては弊協会の事業の意義を確認することができました。今後もより一層充実した事業の実施に尽力しようと弊協会一同まい進いたしますので、変わらぬご支援・ご協力を何卒お願い申し上げます。

最後になりますが、本事業にお力添えをいただきましたすべての方々に深く感謝を申し上げるとともに、派遣生の皆さんの更なるご活躍を祈念し、私からの報告といたします。

参加者報告(派遣生)

表敬訪問がくれた気づき

阿部潤太 海城高等学校



今回のアメリカへの派遣は、私が人生で味わったことのない経験でした。イギリスに3年間在住し、カナダへの留学経験がある私が、ニューヨークに降り立って真っ先に感じたのは、新鮮さでした。自分の人生の中で、様々な場所を体験してきましたが、ニューヨークはその中でも格段に衝撃を受けました。もともとニューヨークという場所に憧れを持っていましたが、それ以上に、国連の本部のある世界の中心に立ち、模擬ではありますが、一大使として、世界で活躍されている大使の方々のように議論の場に参加できることを実感して、感銘を受けました。

まず、ニューヨークの街を歩くと、その多様性と活気に圧倒されました。イギリスやカナダも多文化社会ですが、ニューヨークはさらにその一歩先を行っているように感じました。街角ごとに異なる文化が交錯し、異なる言語が飛び交う様子は、私にとって「世界の縮図」のように見えました。そして、国連の総会議場に足を踏み入れた瞬間、歴史的な出来事や重要な決定がここで行われてきたことを強く感じました。また同時に、世界中から集まった大使や外交官たちが真剣に議論を交わし、国際問題の解決に向けて協力している姿を想像することができました。

今回の派遣を通して、自分の中で衝撃的で学びとなったことは数えきれないほどあります。その中でも最も印象的だったのは、表敬訪問を通して学んだ国際社会でご活躍されている方々の「強さ」です。国連事務次長で軍縮担当上級代表である中満様も、日本政府代表部の山中大使も、UNDPの川瀬さんも、訪問させていただいた際には、とても親切に対応してくださいました。その時、私はそれぞれの方々の芯の強さと内に秘めた力強さをひしひしと感ずることができました。それぞれが自分の信念に基づいて行動し、困難な状況に直面しても揺るがない姿勢は非常に印象的でした。この経験を通じて、海外で活躍するためには、このような確固たる強さが必要であるという重要な教訓を学びました。

この際の「強さ」は、単なる物理的な力や体力ではなく、精神的な強さ、信念、そして不屈の意志のことであると気が付きました。例えば、中満様への表敬訪問の際、私は国連がニュートラルだと発言しました。その際、「国連は neutral ではなく、impartial である」と述べられました。続けて、「neutral ではなく、impartial であるからこそ、国連は世界を平和的な方向へと持って行けるのだ」と仰いました。neutral と impartial はどちらも中立という意味ですが、ここでは neutral は2つの意見の中間的な立場のことである一方、impartial はこの場合、国連憲章の下でどんな立場の国とも同じ接し方をするという立場のことを指します。この際、私は国連を代表する一人として、そして世界の平和を望む一人としての中満様の強い芯を感じました。また、中満様がロシアに訪問し、ウクライナ侵攻に関する会見の場でロシアの広報官の方に、ロシアの行動は国連憲章違反としたうえで、「afterall, you were the drafters of the UN charter」と発言された話にも、中満様の、自らの信念に基づいて行動する芯の強さと、精神力の強さを感じました。

さらに、彼らの共通点として、強い自身と同時に、他者への尊敬と協力の精神が挙げられると思います。私たち派遣生が発言する際にはとても丁寧に傾聴していただき、発言するときはきっぱりと言いたいことを仰るといった部分に、他人の意見を尊重する姿勢が見られたと思います。国際社会で活躍するためには、自己を貫く強さと他者と協働する柔軟性の両方が求められるのだと強く感じました。彼らは常に自分の信念を持ちながらも、異なる意見や視点を受け入れ、建設的な対話を重ねることで、国際社会で活躍されていると思います。

表敬訪問を通じて、私は国際社会で活躍する方々とお会いし、彼らの強さと信念に触れる機会を得ました。彼らの姿勢や行動から学んだことは多く、その中でも特に印象に残ったのは、困難な状況でも揺るがない精神的な強さと、他者との協力を重んじる姿勢でした。異なる文化や言語の壁を乗り越え、リーダーシップを発揮する姿は、まさに不屈の意志の表れでした。困難に直面しても常に前向きで、新しい挑戦を恐れない姿勢は非常に印象的で、私にとって大きな教訓となりました。また、彼らは自己信頼と同時に他者への尊敬と協力の精神を持っていました。この経験を通じて、私は海外で活躍するためには確固たる強さと、他者と協働する柔軟性が必要であることを強く感じました。自分自身の強さをさらに磨き、国際社会で活躍するためには、学び続ける姿勢と自己成長への意欲が重要です。異なる文化や価値観を理解し、受け入れることで、より広い視野を持ち、多様な人々との協働を通じて新しい価値を創造することを目指します。この表敬訪問で得た学びを糧に、将来に向けて一層努力を重ね、国際社会で確固たる強さを持つ存在になることを目指していきたいと思います。

私は、小6のときの学校説明会で、海城のとある先輩がアメリカで最優秀賞を受賞したことを知りました。国連総会ホールを背景に記念写真を撮っているその先輩を見て、かっこいいな、いつかはこんな人になりたいなと思ったことを今でも覚えています。それから、海城のグローバル部に所属して、ほぼ5年間、模擬国連という活動に勤しみました。全日本高校模擬国連大会で最優秀賞をいただいた際、私の中1からの目標が目前に迫ったことを実感して、少し緊張したことを覚えています。国際大会に向けて準備をするにあたって、私たちペアはモデヤスピーチなどといった準備にフォーカスしました。日本語会議において重要視されにくい部分ですが、多くの先輩や、私たち自身の英語会議での経験から、この準備が後々会議で生きてくると思いました。いくつかのパターンを想定しつつ、即興でスピーチを構築できるような練習も行いました。学校のネイティブの先生をお願いしてディスカッションにつきあっていただいたこともあります。実際に大統領のスピーチなどを聞いてみると、彼らの力強く、説得力のある言葉に圧倒され、少しでもそういう話し方に近づ



きたいと思い、イントネーションや目線の配り方、言葉のフローを意識して練習しました。実際の会議では、「プロフェッショナルだったよ」と周りの大使から言ってもらい、とても嬉しかったです。また、私たちの政策面についても、GCスタッフの方々から様々な助言をいただき、ブラッシュアップすることができました。私たちが参加した会議の議題は「2050年までの、教育機関におけるネットゼロ達成のためのフレームワーク構築」でしたが、そもそも教育機関におけるネットゼロ達成がどこまで意義のあるものなのかという点で、詰まってしまっていました。しかし、私たちなりに担当国アメリカにおける教育機関の成功例を挙げ、具体的な政策立案を行い、政策発表会に望みました。他の派遣生がとても内容の濃い政策を提示している中、私たちの政策が現実可能性や具体性が伴っていないことを反省し、GCスタッフの方々の助言もお借りしつつ、政策としてある程度自信のあるものが出来ました。現実可能性を付与するために私たちが意識したのは、その政策が「なぜ今実行されていないのか」ということです。たかが高校生が思いつけるような政策は実際の国連で導入されているはずであり、であれば、どうしてそれが導入されていないのか、なにが障壁となっているのかに関して可能な限り詰めることで、実行力を担保しました。

今回の派遣においては国際大会が主旨でしたが、表敬訪問を通して自分の中で多くの価値観が変わりました。私が主にリサーチの対象としていた国連の実際のスタッフや、その場で交渉する日本代表部、さらには国連関係機関で働くスタッフの方々の生の声をお聞きすることができました。これまで表面的でしか考えることの出来なかった国際問題に対して心血を注いでいる姿や揺るぎない信念を目の当たりにし、私がこれまで参加してきた活動の奥深さと深刻さを改めて認識しました。特に印象的だったことが、初日に訪問した中満様の言葉で、現在あらゆる国際問題が複雑に絡み合っている存在している、という点です。これまで、私が参加してきた

模擬国連会議はテーマを絞って議論してきたことがほとんどで、それらだけでさえ、私たちが提出した決議案は本当に実行力があるのか定かではありませんでした。しかし、そうした一つ一つのテーマが密接に絡み合っていることを考えると、今ある国際問題—経済摩擦、地政学的問題、環境問題、技術変革への対応など—の解決がいかに難しいかが分かりました。また、こうした問題を解決するうえで、国際平和がいかに大切かを実感しました。今回訪問した多くの方々が共通しておっしゃっていたことがあります。それは、「対話ができている」という事実が大事なのだということです。対話は、平和が成り立つ状況でしか成り立ちません。ネットゼロ達成や、移民問題、食料安全保障やエネルギー安全保障など、解決しなければならない多くの問題は、国際社会の安寧と秩序が成り立っている状況でないと解決できないのです。そのことは、昨今の国際秩序を揺るがしている、ウクライナ侵攻やガザ侵攻などの事例からより明確になり、多くの国が短期的な自国益を優先し始めていると、どの方もおっしゃっていました。私は、国際大会とは離れたところでこうしたことを痛感し、私自身の将来を考え直すようになりました。もともと、大学で興味のある分野を探究しながら、可能であればそれに関わる職業に就きたいと思っていました。しかし、派遣事業を経た今、国際問題を解決するために努力されている世界中の方々の一助となれるように、私も励んでいこうと思っています。

今回の派遣を通して、今までの集大成となる国際大会に全力を尽くせたことと、世界の第一線でご活躍されている方々にお会いできたことは、私にとって一生の財産になります。最後に、今回の派遣を計画してくださった GC スタッフの皆さま、励ましてくれた先輩や後輩、そして模擬国連に関わったすべての方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました！

国連の意義

菅野 紘子 渋谷教育学園渋谷高等学校



私は小さい頃から国連に憧れていました。小学校では自分たちのロールモデルに関する授業のとき、私は緒方貞子さんについて発表しました。そして中学校に入学して模擬国連部について知ったとき、必ず入ろうと決めました。

国連では多くの国が集まって決議案を作り、世界中の人々を日々助けているという漠然としたイメージが私にはありました。実際に私が最初に参加した数回の模擬国連会議はこのイメージに当てはまりました。エネルギー問題や難民問題の会議においてコンセンサスで決議案を採択することができ、「こういう風に世界を変えていくのだ、こういう風に人々は助かるのだ」と勝手に満足していました。

しかし、このような模擬国連の甘い感覚は長く続きませんでした。5 回目に参加した会議の議題は「安保理改革」でした。初めて国々が激しく対立する議題と出会い、以前は簡単だと思っていたコンセンサスは達成できませんでした。常任理事国・非常任理事国が明らかに対立し、合意するのが不可能にも思える

議題をそもそも議論する意味がわかりませんでした。環境問題や軍縮の議題でも同じような問題に直面しました。

私はいつの間にか国連の存在意義を問うようになっていました。実際の外交官の方々よりも多少乱暴に合意を目指す高校生でさえ合意がとれない国連には何の意味があるのか。最も人々の命が左右されるだろう紛争や環境問題に関する決議案がコンセンサスで通らない国連には何の意味があるのか。現実世界でも紛争や貧困が深刻化する中、国連の機能不全が度々指摘されていて、私はさらなる不満を抱きながら模擬国連に臨みました。

しかし、今回の派遣事業を通して私は自分なりに国連の意義を考え直すことができました。私たちの議場は世界貿易機関、議題は「世界貿易システムにおけるアフリカ諸国の導入」で、アメリカ合衆国を担当することになりました。世界貿易機関は多くの国連機関とは違い、決議案は基本的にコンセンサスでなければ採択されません。その事実を頭に入れながら私たちはリサーチを進めました。

しかし、リサーチを進めれば進めるほどこの議題でコンセンサスを達成できるのかが不安になりました。アメリカはアフリカ諸国との貿易において中国とひどく対立しており、欧州諸国とともに中国の経済政策を強く非難しています。それだけではなく、アメリカはトランプ政権時に多くのアフリカ諸国との協力関係を打ち切ったため、アフリカ諸国からの信頼が得られていないのです。

私は再度国連の存在意義について悩まされました。このように明らかに対立と分断が起こるような議題を議論することにはどのような意義があるのか。二国間の貿易交渉を好むアメリカとして世界貿易機関で議論する

意味はあるのか。このような悩みを抱えながらニューヨークへ旅立ちました。

今回の派遣事業では 1 日目に国連事務次長・軍縮担当上級代表の中満泉様、2 日目に日本政府代表部の山中修様に表敬訪問をする機会をいただきました。この 2 つの訪問を通して私の国連に対する見方が大きく変化したのです。

まず、1 日目の中満様に表敬訪問をした際には、中満様は私たちの質問に丁寧にお答えしながら話をして下さりました。そこで国連の存在意義についてお伺いしました。

中満様曰く、国連は国際社会で対話ができる唯一の場です。国連のほかですべての国が交渉をする場所はありません。そして対話がなぜ重要なのかというと、近年紛争などの問題が勃発している中、最も恐ろしいことは議論が硬直化することです。議論が進まなくなると、国は互いの理念を一切考慮せずに行動し、多くの人々を傷つけるのです。私は、例えば対話が一見難しそうだとしても、対話を諦めないことの大切さに改めて気づきました。

続いて、2 日目に山中様に表敬訪問をした際にも同じ質問をお伺いさせていただきました。

国連は確かに紛争などを止めることはできていませんが、そもそもすべての国が加盟して議論に参加しているという事実には意義があるのです。国連が存在していなかったら恐らくいま起こっている紛争などはより取返しのつかないものだったでしょう。

私は中満様と山中様の答えに感銘を受けました。日本の模擬国連では国が出席することは当たり前のことです。しかしよく考えてみると、世界中の国が互いに違う理念を持ちながらも世界共通の問題にともに取り組もうとしていること自体がすごいことです。この表敬訪問で得た経験から、たとえ安保理改革やアフリカ諸国の世界貿易システムへの導入などの合意が難しそうな議題に直面したとしても、諦めずに交渉をすることの重要性がわかりました。

国際大会の会議当日。私はこの国連に対する新たな見方をもって会議に臨みました。会議の序盤はやはりアメリカに対して不信感を抱くアフリカ諸国が多く、私たちの政策に興味を持つ大使が少なかったです。しかし、私たちは諦めずに議場内のすべてのアフリカ諸国に声をかけアメリカの政策とスタンスを共有し、相手の意見を聞きました。地道な作業でしたが、会議の後半にその成果が出ました。私たちの政策に共感し、私たちのグループに加わりたいというアフリカ諸国が声をかけてくれました。そこで私たちは自分のグループの DR に彼らの文言を盛り込むことで多くのアフリカ諸国の賛同を得ることができました。

結局私たちの決議案はコンセンサスを得ることができませんでした。しかし、それは決して行った議論が無意味だということではなく、逆にアメリカとアフリカ諸国の間の共通理念を作り出すことができ将来の交渉への第一歩を踏み出すことができたのではないかと思います。国連は確かに結果が大事ですが、それに至るまでの交渉や対話も同じくらい大切です。結果の大前提となる交渉を諦めずに行う場を提供してくれる国連にはこのような役割を国際社会で果たしているのではないかと思います。

最後に、今まで支えて下さった先生方、部活の仲間、会議でお会いした他校の方々、他の派遣生、友人、親、そしてグローバルクラスルームの皆様に感謝申し上げます。

私が高校模擬国連国際大会派遣支援事業に向けて立てた目標は、「形式の違う海外と日本の模擬国連の共通部分を見つけることで模擬国連の本質を探りたい」というものでした。結果的には2日間の会議と準備期間を通してこの目標を達成できたと思います。

私の思う模擬国連の本質、つまり世界中の学生が模擬国連に取り組む意義は、相手を全力で理解しようとする姿勢を身に付けることです。事前準備の段階から他国をリサーチすることから始まり、会議中にお互いの意見を積極的に聞くことまで、模擬国連における行動すべてがどの国の会議でも相手を理解しようとすることに繋がっています。日本の会議では会議中に外交という形で他グループの国の意見を聞きに行き、グループ同士、または一対一の国同士で議論をすることが一般的です。世界中から大使が参加していた国際大会では外交という日本でみられるような役割が非公式討議では見られなかったものの、公式討議を多くとることで自国が他国に理解してほしいことを何回もアピールをすると同時に、各国のスピーチを必死に聞いていました。他国のスピーチに対して Point of Information を用いて質問をする形式は私にとってとても新鮮でしたが、これは相手の目的や政策の詳細を明確にしてもらい、より深く理解しようとする意識が表れているのだと思います。



私の議場の議題が「世界貿易システムへのアフリカ諸国の統合」だったこともあり、公式討議中のスピーチでは、アフリカ諸国のために必要なことは何なのかを共に考えようと呼びかけている大使が多くいました。自分の国が相手の国と協力できる点を探することは世界中どの国の模擬国連でも重要視されていて、実際の国際連合で開かれる会議の目的をきちんと模擬できているように感じました。

会議を通して、一つだけ海外の模擬国連のほうが実際の国連に似ていると思うところがありました。それは、日本の会議よりも各国の現実世界での注目度や影響力などの立場が会議に反映されていたということです。表敬訪問でお話を伺うことができた日本政府代表部の山中大使から学んだこととして、確かに国連はすべての国が平等な1票を持っていますが、他国の影響によって投票行動を変える国もいるように、国同士の関係がとても重要です。その点において、国際大会ではどの国が決議案のスポンサーになるのかということを様々な意味で重要視していたと思います。例えば、今回の会議で私が担当したアメリカ合衆国はグループを作るときに、アメリカ合衆国の財力に頼れるよう、絶対にスポンサーになってほしいという声を多くの大使からかけられました。このことから、私たちは担当国の現実世界での立場をどのように会議の中で利用できるか、自ら何をアピールできるかを今まで以上に考えていました。もちろん日本の会議でも自国アピールであったり、絶対に協力をしたい国に駆け寄ったりすることはあります。しかし、海外の模擬国連ほどある国の財力や影響力

に直接重要性を置いている会議には参加したことがありません。ただ、逆に言えば日本の模擬国連のほうが少しだけより平等な1票を実現できているということかもしれません。

日本と海外の模擬国連の違いは、既に挙げた公式討議の回数や会議内での国の立場の他にも多くありました。議長とフロントの権限が日本に比べて強いことであったり、ものすごく自由なグループの決め方がかなり自由であったりと、私たちは会議の序盤に戸惑うことがとても多くありました。しかし、そこで私たちが学んだのは日本の模擬国連は世界に通用するということでした。

今回の会議で最も日本の模擬国連が活きた場面は外交と妥協案を事前に用意することでした。海外の大使はアmendメントという、お互いの決議案を会議の後半に修正するシステムに慣れていたため、それまでは各国のトップラインに集中していました。しかし、会議時間の関係でアmendメントが短縮されたことにより、多くの国にとって最後の交渉の場がなくなってしまいました。一方、私達は日本の会議に参加した経験からトップラインと同時に他国の利益も考え、事前に妥協案を用意していました。また、積極的に他のグループの政策を非公式討議の間に聞きに行ったり、他のグループにコンバインを呼びかけたりもしました。非公式討議の中で多くの交渉をすることに慣れていない大使も、私たちの呼びかけに応じてくれる方が多くいました。

このように、形式や会議内の認識が日本の模擬国連と違う場所でも、自分の行動の意図と目的をきちんと相手に伝えればほとんどの大使が協力してくれるのだと実感しました。今までの会議で学んだことは間違いなく役に立ちましたし、逆にその経験が他の大使と差をつけることができた部分でもありました。国際大会は日本の模擬国連で培った私たちの能力は世界に通じると自ら感じる事ができた経験でした。

今回の高校模擬国連国際大会派遣支援事業で、私は国連について、世界中の高校生について、そして世界と比べ日本の模擬国連についてなど、日本にいただけではわからなかった多くの学びを得ることができました。今まで以上に模擬国連と向き合うことができたニューヨーク派遣事業は一生忘れられない経験となりました。

最後になりましたが、今回の派遣で支えてくれたペア、顧問の先生方、先輩方、家族、派遣団の皆さん、そして派遣にかかわってくれたすべての方に感謝の気持ちを申し上げます。



私は今回の国際会議で初めて海外の模擬国連に参加しました。帰国子女でない私にとっては、英語でのコミュニケーションが最も大変でした。事前準備で英語バージョンの政策を書いた紙を用意し、会議中はそれを見せながら説明をしていたのですが、やはり WP や DR を作成する上では相手との会話の内容を理解し、それに対して瞬時に応答しなければならないため事前準備だけでは対応できませんでした。私が考えた改善点は、説明をする際に一番伝えたい結論を最初に述べることです。詳しく理解してもらうために、私は理由から話を始めてしまう傾向があるので結論から述べることで私の意図がより伝わったように感じました。英語は今まで、勉強のカテゴリーの一つでしかありませんでした。ですが、英語は国際語であり、コミュニケーションをとる上で不可欠なスキルです。将来の人生のためにも英語の重要性を忘れず、自身の英語のスキルの向上のために今後も努力していきたいと思います。

次に、私が実際に国際会議に参加して感じた、日本の会議との相違点を 3 点紹介します。

1 つ目は、モデとアンモデについてです。日本の会議では最初にグルーピングや各国のスタンスについてのモデを取り、その後はアンモデが何回も続くというケースがよく見られます。しかし、今回私が参加した UNDP の議場では、モデが多くとられ、一日目のほとんどがモデが行われるという流れでした。それだけではなく、日本の会議のアンモデは 50 分などの長い時間行われることが多いですが、国際会議ではアンモデが 20 分程度でとても短かったです。

2 つ目は、会議中は機器の持ち込みが禁止されていることです。そのため、WP と DR は手書きでの作業となりました。特に大変だったのは、DR の共有が原本を座席ごとに回していくことでしか行えないということです。時間をかけて読むことができず、各グループの DR の内容を完璧に把握することは困難でした。国際会議において、機器の利用ができない事での支障は大きいように思えました。

そして私が国際会議に参加して日本の会議と明らかに違うと感じた 3 つ目は、他の大使にとってコンセンサスやコンバインの重要性が低いことです。その理由として考えられるのは、会議の最終目標が異なっているからだと思います。国際会議では国益や国際益を重視しているというよりも、議題に対して各グループの特色を活かしてどのような政策を生み出せるかが会議の最終目標となっていたように感じます。

このように日本の会議とは異なった特徴の会議の中で混乱や焦りも感じましたが、模擬国連という一つの活動を実際にグローバルな環境で参加できたことは幸せでした。日本の会議と国際会議の双方のメリット・デメリットを活かして今後の模擬国連を好転させていきたいと思います。

次に、私にとっての模擬国連に対しての変化を紹介します。

国際会議では、私と同じぐらいの年代の多くの海外の方が同じように国際問題に興味を持ち、大使として模擬国連をおこなっていることを知って最初は驚きました。育った環境は違うけれども、同じ地球上で暮らす人間として共通して持つ問題を、国際機関の職員が各国から集結しているように、グローバルな環境で大使として議論ができたことの貴重さを帰国してから改めて実感しました。

国際会議の参加は私にとっての模擬国連の規模観を大きく変えました。今までの模擬国連は日本だけで留まっていたのですが、世界中にはこんなにも模擬国連という活動を行っている方がいるという事実を実際に目にしたことで実際の模擬ではない国連を想像することができました。今までの模擬国連の活動を通して私は、模擬国連は他人との関わりが最も大切だと思っています。なぜなら、1人だけでは生み出せなかった限界を他の人と議論や協力していくことでその限界を超え、大きな結果として形作ることができるからです。

このように、世界中にいる模擬国連の活動をしている人々が集まって議論をしたら、さらなる成果を作り出すことができるのではないのでしょうか。

これからも模擬国連の可能性に期待を抱きつつ、多くの人と議論を重ねていきたいと思っています。

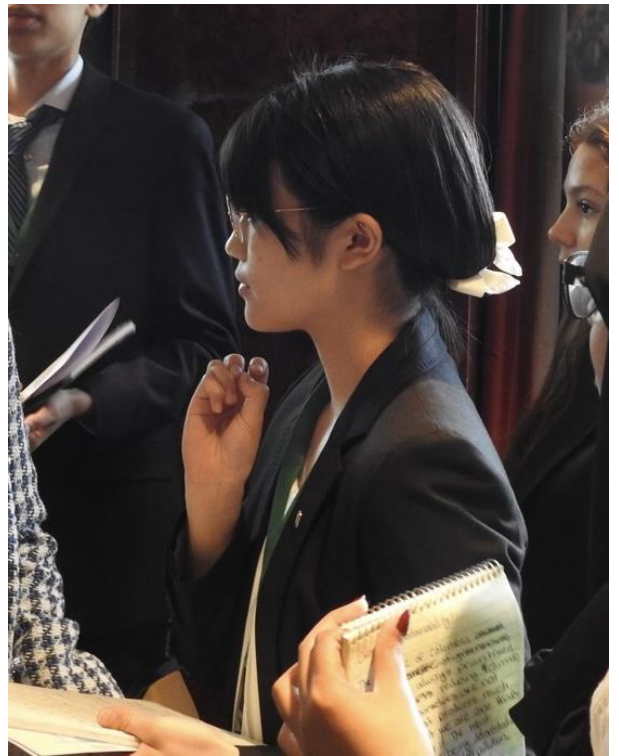
また、国際会議への参加以外からも多くを学びました。グローバル・クラスルーム日本協会の方々にはとてもお世話になりました。渡航までの期間が短いにも関わらず、質問に答えていただいたり、我々の政策のレビューやアドバイスをもらえることができ、模擬国連としてのスキルの向上だけでなく、政策をつくる上で、ひとつひとつを根本から深く考えていく楽しさも教わることができました。それだけでなく、渡航前には在日米国大使館に、渡航先では国連事務次長の中満様、日本政府代表部、国連開発計画への表敬訪問へ行かせて頂く機会が得られました。この表敬訪問というニュースに出ている方々などに直接お話を聞かせていただいたり、国際会議に参加する上での疑問点を実際に仕事として働いている方々に質問させて頂くという貴重な経験は私の人生にとってかけがえのないものとなっています。今後も国際会議で学んだことを活かして会議に参加していきたいと思っています。

私はこれらの学びを自身のみに留めるのではなく、他の人へ共有することが重要だと感じています。最近では、社会問題に注目が集まる中で、問題が存在していることは認識しているが、その問題がどれほど深刻なものなのかを実感できていない人がよく見受けられます。実際に私も中学校3年生で模擬国連を始める前はSDGsという単語ぐらいしか知らなかったように思います。私が高校模擬国連に出会えたことにより、社会問題に興味を持つきっかけとなったように、多くの方が社会問題に興味を持てるきっかけづくりをしていきたいと思っています。国際大会に参加した同年代の海外の生徒の方々のように模擬国連の議題に興味を持つことで、今までよりも問題に対しての危機感などを持って日々の暮らしを送ることができるのだと思います。そうすることで問題の解決や目標の達成にも大きく近づくことができます。高校生だけでなく、子どもから大人までそして海外の方々にも社会問題に目を向けることの大切さを発信していきたいと感じました。

模擬国連から得た「たからもの」

草間 咲良 実践女子学園高等学校

私にとって模擬国連に取り組んできた約2年間は、かけがえない財産であり、自信であり、最高の経験でした。私は模擬国連を通して、以下のことを学びました。1つ目は夢中になることの楽しさです。私は顧問の先生の英語が聞き取れたことが嬉しくてなんとなく模擬国連をやっている同好会に入会し、部員もほぼおらず、ルールを教えてくれる人もおらず、ゼロから手探りの状態で模擬国連を始めました。そして会議に参加していくうちに模擬国連にハマリ、国際大会までひたすらに突っ走ってきました。過去の二年間を振り返ると、勉強や他の活動との兼ね合いもあり常に忙しく、かつ非常に充実した日々であり、私は、模擬国連を心からやりきったと思うことができました。2つ目は「知ること」の大切さです。模擬国連で扱われる議題は、我々にとってあまり馴染みがないものもあり、我々の生活には直接的には関係がないように感じますが、これらの問題を「知る」ことは世界がより良くなるための一歩だと気づきました。直接課題の解決に



貢献できなくても、現状や解決のための行動を「知る」ことで意識が変わり、その後の物事に対する姿勢や考え方が異なってくると思います。この少しの意識の違いが今後さらに発展していき、目に見える成果となっていくのだと信じています。また、このように「知ること」を普及させていくことも、模擬国連が存在する意義の一つであると思います。私は UNDP の議場で、「グローバルサウスの現代の産業の発展の加速」という議題の会議に、アメリカ大使として参加しました。約5か月という長い期間、会議の準備をしていく中で最も難しかったことは、「アメリカが支援をする理由」と「各国が支援したいと思える動機」について考えることです。この派遣を通じて得た私にとって最も大きなことは「将来の方向性が決まったこと」です。進路などに悩む日々が続いていましたが、表敬訪問でのお話や国際大会への参加を通して自分のやりたいことが明確になっていきました。渡米前は表敬訪問をさせて頂く方々の凄さにあまり実感がわかなかったのですが、表敬訪問本番になるにつれて「私は本当にすごい人と今から話すのか…?!」という感情が湧いてきて終始緊張していました。特に、日本政府代表部の山中さんが仰っていた「どんなに大変な状況でも、対話をし続けることに意味がある」という言葉は、私の考え方や今後の生き方にポジティブな影響を与え、私が今後生きていく中で胸に留めておきたい言葉でした。会議準備では、アメリカは ODA や USAID を介した支援を積極的に行っていますが、ここまで積極的になる理由や支援のモチベーションなど、どこまでを国益とするのかの判断が難しかったです。また政策を立案していく中で、アメリカという大国であるからこそできる支援でも、アメリカより経済規模が小さい国にとっては同様の支援をするモチベーションがない、といった問題が生じ、この解決に会議直前まで時間を割きました。アメリカという大国として政策を立案していく段階で、考えた政策がアメリカのような本当に一部の先進国にしか実行することが厳しい、という問題に直面しました。政策の実行主体を明確にしすぎても限定されすぎてしまい、政策に取り組める国が少なくなってしまうので、その政策を実行するうえで効率が悪くなり、実行力に乏しいという結果となってしまうことがありました。私はこのような問題に対処していく中で、模擬国連そのものに対する考え方が変わりました。例えば私は国際大会の準備をする前まで、

政策の実行主体を出来る国と設定したり、各国裁量で政策を行う、といった文言にすることで、国益に反しない、より多くの国の賛成が得られる柔軟性を持った文言を作ることが重要であると考えていました。しかし、各国裁量といった表記にしてしまうと、できない、やりたくない国は政策を行わなくても良いので、反対されにくい分、実行力に欠けてしまうという問題が発生し、必ずしも”出来る国が”などと表記し、柔軟性を持たせる文言が良いという訳ではないということに気づきました。そこから前述したような政策を実行するモチベーションにもフォーカスして会議に臨むようになりました。

会議が始まり、日本の模擬国連との違いに適応するのに非常に苦労しました。日本の会議との相違点として具体的には、論点が設定されていないことやスピーチの重要度が日本よりもはるかに高いことなどが挙げられます。また、海外の会議と日本の会議で重視されていることが異なるという点も興味深かったです。日本の会議では、「国益と国際益」などを考慮し会議に参加することが多いと思いますが、私は国際大会で特に重視されている点は、「決議案を作り、提出すること」であると感じました。国益を重視するあまり会議から孤立気味になってしまっても、国益を確保できたという点で成果と捉えるのか、国際益を重視して、また多くの大使が納得できる内容で決議案を作成し提出することで、国際社会全体の発展に貢献したという点で成果と捉えるのかの判断は、非常に難しいことであると改めて感じました。我々は最初、アメリカという大国として、様々な会議で分裂しがちな我々を含む先進国とグローバルサウス、新興国の架け橋的な存在になろうという目的のもと、様々なグループにまわって自国の政策の説明を行い、先進国グループではアメリカの政策を組み込もうと努めました。しかし日本の会議との進行の違いや英語での対話に苦戦し、予想していた展開にはなりません。一番悔しかったことは、言いたいことは頭に浮かびますが、英語として出てこなかったことです。ものすごくもどかしかったです。大変な状況の中でも、なんでもいいからとにかく発言しようという気持ちで会議に参加し、アメリカの国益は確保できた形で会議は終わりました。色々な反省点がありますが、やり切ったと思える会議でした。全日から、会議準備、そしてアメリカで、アメリカ大使として国際大会に参加でき、様々な貴重な体験をさせて頂き本当に楽しかったです。ここまで導いてくださった GC の方々、ついてきてくれた後輩達、常に明るく励ましてくださった先生方、家族、そして素晴らしい仲間達に心から感謝申し上げます。

私にとっての模擬国連

中農 日向 西大和学園高等学校



この度、第18回日本代表派遣団として、高校模擬国連国際大会に参加させていただきました。このような貴重かつ人生の大きな岐路となる機会をいただき、非常に光栄です。今回の派遣事業及び模擬国連活動で得た学びについて、ご報告いたします。

なぜ模擬国連に参加し始めたのか今では正確に思い出せませんが、最初の会議で1文字も話すことができなかったほど内向的な私は、物怖じせず他国に主張しリーダーシップを発揮し会議を主導することにこそ意味があるのだと単純に思い、「勝てるように」「賞をとれるように」と努力を重ねてきました。中々憧れた会議行動ができるようにはならず苦慮する中でも、国際問題について新たな知識を得て必死に解決策を探るリサーチ・議論の過程が心から楽しく、意義深さを感じていたことが模擬国連へのモチベーションを引き伸ばしてくれていました。

しかし、全日本大会が近づくにつれて、自分がリーダーであることや会議を主導することしか頭になく、話し合いの内容を適当に妥協したり気後れした大使を無視して会議を推し進めようとしていたりしている自分や一部の大使の姿に気づき、本質的には国際連合の何をも模擬していないことが一気に愚かしく感じられました。国際会議の場で一国の代表たる大使の意見を蔑ろにしたり、会議を円滑にするために国益を無視した譲歩をしたりすることなど、本来あってはならないはずです。そこで私はすべての国が本当の意味で納得できるような最善の文書を可決するために、論理的に議論をし尽くす姿勢を徹底するようになりました。対話とは、単に何かを論じ合うことや意見を並べ合って相手を凌いだものを結論として決めることではなく、言葉選びや所作の一つ一つから「あなたと分かり合いたい」という目標を共有してお互いの立場と意見を必要な地点まで擦り合わせていくことです。この変化は表層的なリーダーシップに終始しない議題や他者への向き合い方の追求という意味で、私の対話能力の成長に繋がりました。

しかし理想とする大使像が定まると同時に、「私が模擬国連に参加することには何の意味があるのか」という問いがそれまで以上に私に後ろめたさを感じさせるようになっていきました。模擬国連においていくら私達が理想を追求したとしても、それによって国際問題が前進することはなく実際に救われる人はいません。悲観的な考えではありますが、問いにはっきりと答えを出せないまま、会議中何度も今口にするような困窮や痛切さを実際に味わったことのない私達が堂々と国際問題を議論することに葛藤を抱えながら全日本大会、そして国際大会に臨みました。

国際大会で私達は「難民危機発生時における庇護希望者の安全確保/Ensuring the safety of asylum seekers in periods of refugee crises」という議題を担当しました。近年飛躍的な進捗がない国際的人口移動の分野で、さらに保護の枠組みがを持たない庇護希望者に関する議題を担当したことは、問題解決のための強硬的な政策やいわゆる高校生らしい発想のひらめきに依存せず、資金不足や協力関係の欠如などの堂々巡りになってしまう根本的課題にじっくり真摯に向き合う契機となりました。

自国と他国の利益や国連の希求する国際益は必ずしも一致しないからこそ、各々の立場に身を置いて対話を行うべきという考え方はよく耳にするものであり、それによって多様な価値観への理解が深まるという点も模擬国連の教育効果の一つとされています。グローバルクラスルーム日本協会の皆様のサポートの下で会議準備を進める中で、自国と他国と国際益を更に俯瞰的に捉え国際社会の構造的課題について目を向けることの重要性に気がつくことができ、その点で模擬国連が国際人の輩出に貢献しているのだと改めて感じます。

いよいよニューヨーク派遣の日となり、本物の国連本部と国連関係者の皆様に前に高揚と感銘を覚えながら迎えた国際大会では、私の強みだった表現力は英語力という弱点になり、性格からもあまり主張できるタイプではない私は、期待よりも不安いっぱい議場に入りました。しかしいざ会議が始まると、息が感じられそうな距離間と激しさで庇護希望者保護という一つの問題について真剣に議論する世界の高校生達を前に、今まで過ごしてきた生活のように後ろ向きになる猶予はなく、私はこれまでに無いほど議論に対して前のめりに最後まで諦めることなく向き合い続けることができました。ヨーロッパや中東、ラテンアメリカやアフリカなど地域的にもまた文化的にも多様なバックグラウンドを持つ彼らの行動は、会議の進行も含めて予想外のことばかりでしたが、意見をぶつけ合い耳を傾け合う姿にはやはり躊躇や諦観など後ろ向きな姿勢はありませんでした。

また、この雰囲気はニューヨークの国連本部にも一貫したものとして存在していました。表敬訪問などでお話を伺った関係者の方々は口を揃えて、「国連の機能不全が指摘されている中でも、意見を異にする国同士が対話する場が残っていること自体に意味がある」と仰っていました。国際問題に魔法の弾丸は存在せず、ただ愚直に話し合いを続けるしかないのです。

議題や担当国に対して、論理的に解決したいと冷静で客観的な視点を持てば持つほど、実際に苦しむ人々の痛みや辛さからは離れてしまうような気がしてなりません。しかし、今回国連で本当に国際問題を解決しようと前に進み続ける人々とお会いできたことで、ただひたすらに誠実に弱い立場の人々の気持ちに向き合いながら対話続けることに確かに意義があり、むしろそれによってしか国際問題を解決することはできないのだと実感することができました。

模擬国連という活動自体は現実世界での進展に影響しない以上、模擬国連の意義というのはそれを経験した私達が何を学び活かすかにかかっています。私はこれからも、今日の前の問題が途方もなく高い壁に思えたとしても、助けを必要とする人々のことを廉直に考えながら、相手と分かり合おうという目標を失わず行動し続けていきます。私の拙文をここまで読んでくださった皆さんも、どうかこの基本的なことの大切さを模擬国連に、いやこれからの人生においても忘れずに取り組んでいただきたいです。

最後にはなりますが、昨年の全日本大会から国際大会まで幅広い面で多大なサポートをしてくださったグローバルクラスルーム日本協会の皆様、何年にも渡って私達の模擬国連活動を支え導いてくださった先生方や先輩方、幼稚な私の行動にも関わらず応援を続けてくれた寛大で尊敬する両親、ペアの吉村さんを始めとしてこれまで良いことも悪いことも一緒に経験してくれた友人達など、これまで私に関わってくださった全ての人に改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

私は模擬国連が大好きです。自国や他国のことについて徹底的に調べあげ、一国を背負う大使として各々が異なる信念のもとで、その会議にとっての最善を追求するという過程には、真剣な思考や議論の末での成長や絆といったものがあるように感じてなりませんし、同時に自分や他人、ひいては社会の意識と向き合うことが求められているように思います。

私は模擬国連を始めるか悩んでいた時期が長く、背中を押してもらってようやく一歩踏み出せたのは一年前のことでした。初めて出た会議で、自分の無力さを痛感すると同時に、自国の主張をしっかりと繰り広げる周りの大使の熱に当てられ、模擬国連を極めてニューヨークに行きたいと思ったことは今でも記憶に残っています。普通や平均というものを過度に考え、無意識に従ってしまうことの多かった私にとって、自分の主張を持たなければ存在意義はないと気づいたことは残酷な現実でありながら、乗り越えなければならない壁でした。

そして何度か会議に参加する過程で、他の大使を敵ではなく一緒に良い会議を作り上げる味方だと捉えるようになったことで、ただ主張するのではなく相手の立場に立って考えることの重要性に気づき、自明のように反面難しいことを一つ一つ積み上げていくような、学びの集大成としてニューヨークでの会議に臨みました。

今回、私が参加したのは国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の「難民危機における庇護希望者の安全確保」という議題です。アメリカ大使としてこの会議に臨むうえで、私が最も頭を悩ませたのはリサーチの過程でした。庇護希望者とは、庇護国に対して正式に庇護を要求した者を指し、難民条約で規定された保護の対象外にある存在です。そのため、国家の主権との兼ね合いの結果、その保護の重要性が軽視されてしまう傾向にあったり、難民危機に起因する問題点を列挙するとその全てがキャパシティの不足に帰着してしまうという課題があります。また同時に、アメリカのウクライナ侵攻・イスラエル情勢に関するダブルスタンダードな立場はこの難解な状況にさらなる拍車をかけました。この状況を打破できたのは、グローバルクラスルームのメンターの方やペアの中農さんと議論し合った末でのことで、生活の時間を専らリサーチに捧げていたにも関わらず、設定した最後の論点に関してペア間で認識の一致を得たのは飛行機の中でのようやくのことでした。避難民の発生から定住先の社会への統合までを時系列順に考えてみたり、政策の実現可能性などについて深く考えたりといった、具体的な条文を作ることに費やした時間は、大切に楽しかった記憶であり、政策立案というものに妥協せず最後まで向き合えたという大きな自信になりました。

難民問題において、名称が変われば持つ権利も変わります。どんな文書を読んでも、どれだけパソコンと睨み合っても、その延長線上にあるのはすべて人です。しかし、庇護を求めざるを得ないような状況やその心理的苦痛を経験したことのない自分が、現在、大規模な紛争や戦争のない日本という国から我が物顔で議論を繰り広げているということに、自分の中でなにかの矛盾を感じずにはいられませんでした。また、パソコン上に軽々しく表示されてしまう紛争の死者数にただの数字以上の意味を見出すことには、まるで遠い世界の話であるかのように複雑なブラックボックスが隠されているように思われました。ニューヨークに行って、このよう



な感情が完全に消化されたというわけでは決してありません。しかし、模擬国連を通して得た着眼点を用いて、こういった矛盾とも思える葛藤を、自らができることは何かを自問自答し行動に移すことによって紐解き、社会に還元していけると気づくことができたのは、ニューヨーク派遣での事でした。

模擬国連においては、様々な情報から導き出した自分なりの答えを正しいと信じて発信して、会議を自分でリメイクしていくのだという意識が求められます。自分が選んだ選択が正解かどうかなんて全く誰にも分かりません。ほんとうに怖いです。ですが、模擬国連はその連続です。他国を思いやったうえでの行動なら受け入れられると信じて、勇気を持って一步踏み出すこと。異なる他者に対する想像力を持てば、周りの大使は必ず反応してくれること。私はこのことを過去の会議を通して十分に知っていて、形式といった表面上の違いはあれど、ニューヨークでも根本となる大切な部分は変わることはないと信じていたので、日本での会議と変わらない気持ちで当日の会議に挑むことができました。自分がこの場でできる最大限のことをやってやろうという意思を貫けたことを嬉しく思うと同時に、これが日本語だったらと歯がゆい思いをしたという現実、言語能力だけにとどまらない、考えを言葉にする能力を磨いていこうという決意をより一層強めました。

そんな私ですが、ニューヨークに到着した時、落ち着いて洗練された街並みに息を呑み、沢山の写真を撮って、東京や大阪とはまた異なったその街の活気溢れる様子にとってもはしゃいでいました。同時に、不安に陥ってもしました。路上生活者が道の数メートルおきにうずくまっている様子や、ニューヨークにある大学でのイスラエル問題に対するデモの発生は、議題に対する現実感といった生々しさを私に突きつけていたのです。そして情勢変化の真っ只中にあり、移民流入が耐えないアメリカで、難民問題についてアメリカ大使をやるのかと思うと一気に自分のリサーチの足場が揺らいだかのように感じていました。それでも自信をもって会議に臨めたのは、あれだけリサーチをしたんだから大丈夫だと思えたことや、表敬訪問で第一線で活躍している方々のお話を聞いて、自分も世界を良くしようと飛び回っている人たちの隣にいつか並びたいと思ったからです。

そんな貴重な機会であった表敬訪問の中でも、特に山中大使の「議論をしているという事実それ自体に価値がある」という言葉が強く印象に残っています。どれだけ交渉が難航していたとしても、視点を変えればまずはどの国も議論の土俵に立っていることが評価できるのです。国連事務次長・軍縮担当上級代表の中満様のお話にもあった「国連の意義とは原則について声を上げ続けることだ」という言葉と合わせて、言葉というものが持つ力について考える機会になりました。立場が変われば主張も変わり、目的意識も人によって違います。その中で物事の本質を捉えることは非常に難しいことです。しかし、難しいことだと知っているからこそ、他者への想像力を研ぎ澄ませ、自分なりの解釈を磨き上げていく姿勢が、そして人ごとではないという意識が芽生え、議論することに価値は生まれるのではないのでしょうか。私は何のために模擬国連をやるのか。そして私には何ができるのか。この問いに対する答えを出すにはもう少しの時間と経験とが必要なようです。しかし、私の力で1日でも長く、1人でも多くの人が笑って暮らせるのならそれで願ったり叶ったりです。

私にとって模擬国連は日常生活に互いに影響を与えるものでした。他国を思いやった行動を取ることは、心の目線を合わせて会話することに、自国の国益を守り抜くことは、他人の目や環境を気にせずに、自分のやりたいことにまずは向き合ってみることに繋がります。世界は果てしなく広く、知らないこと、分からないことだらけです。でもあの時、模擬国連始めてみようと思いを決めて一歩踏み出したから、今があります。まだまだ自分の可能性は広まっていくのだと信じて、これからも歩み続けていけることが嬉しくて仕方ありません。

この派遣は、これからの自分の人生の道標となるような、大切な 1 ページです。模擬国連を通して出会ったすべての方々に感謝します。

支援団体一覧

本事業の実施にあたり、多くの方々から温かいご支援を賜りました。ここに厚く御礼申し上げますとともに、
謹んでご芳名を掲載させていただきます。

後援

外務省
文部科学省
国連広報センター

協賛

株式会社公文教育研究会



協力

日本航空株式会社、理想科学工業株式会社、みらいふ（河合塾）

助成

公益財団法人公文国際奨学財団
公益財団法人 三菱 UFJ 国際財団

メディアパートナー

the japan
times



編集・発行 一般社団法人グローバル・クラスルーム日本協会(JCGC)

発行：令和6年8月